琉球の船乗りと「渡閩航路図」

山田　浩世（沖縄県立芸術大学）

◎琉球と中国間航路を描いた「渡閩航路図」

「貢進船図（部分）」（東京国立博物館所蔵）

中国（明・清王朝）や日本、東南アジアとの交易で栄えた琉球王国は、船を巧みに操って各地へと赴きました。特に、琉球―中国間を結んだ進貢船は、100名以上が乗り込むジャンクタイプの帆船で、那覇を出発したのち、慶良間諸島を経由して中国の福州を目指しました。琉球国王が新たに即位すると、中国からも使者（冊封使）を乗せた船（冠船）が派遣され、進貢船と同様に大海原を越えて琉球へとやって来ました。琉球王国の時代、海には多くの帆船が行き交っていたのです。

技術の発達した現代では安全な船旅も、急な天候の悪化や目に見えない暗礁など、当時の人びとにとっては大変な危険を伴う旅でした。琉球の船乗りたちはどのように、この危険な海を越え交易を担っていたのでしょうか。これらの疑問にこたえてくれる興味深い資料の一つが、沖縄県立博物館・美術館に所蔵される長さ5.8mにも及ぶ「渡閩航路図」です。閩は福建省の別称で、まさに那覇から福建省福州へといたる海の道（航路）の世界が描かれています。

◎海上交通の十字路であった慶良間の海

「渡閩航路図」に描かれた島々の中でも、慶良間諸島の描写は非常に細かく、特に複雑に描かれています。なぜでしょうか。実はその航路を調べてみると、現在と異なり、那覇から出航した船は北上して日本へ向う以外の多くの船がまずは慶良間諸島へ立ち寄っており、中国のみならず、宮古・八重山諸島へ向う際にも経由しており、慶良間の海は琉球王国の海上交通の十字路とも言える存在でした。慶良間海峡は天然の停泊場所として知られ、その出入りのための目印となる岩礁や小島などまでが、「渡閩航路図」には描かれています。

「渡閩航路図」のうち慶良間諸島部分（沖縄県立博物館・美術館所蔵）

◎地図とは異なる航路図の世界

「渡閩航路図」を詳細に見てみると、座間味島などの大きな島だけでなく、小島や茶色の砂のように描かれる岩礁・暗礁までが描写されていることに驚かされます。まだ十分に分かっていないことも多いですが、我々がよく知る測量によって作られた「正確」な地図（海図）などとは異なる独特の表現によって、海を行き来する人びとの知恵や知識が描かれていると考えられます。琉球の船乗りたちは、慶良間の島々、さらには航路上にある海の世界を深く認識していたことを本図は教えてくれます。